埼玉県立文書館　令和六年度企画展

天体観測

―歴史のなかの星と人びと―

人は古来、星を読むことで吉凶を占い、暦をつくってきました。また、文学においても、星は物理的には遠い存在でありながら、身近なものとして記されています。

本企画展では、日本の歴史における人びとと星の関わりを収蔵資料から読み解いていきます。人びとは、星をどのように捉え、どのように書き描いたのか。そして、それらが人びとの生活のなかにどのように取り入れられ、位置づけられてきたのか。歴史学以外の視点も取り入れ、現在の私たちとは異なる星との関わり方について考えていきたいと思います。

はじめに　星に祈る―星祭―

年に１度の七夕は、私たちが星や宇宙を身近に感じる時です。また、密教の法では、天変地異を除け息災延命を祈るために、星を供養します。展示の導入として、星への祈りに関わる収蔵資料を紹介します。

1. 星を愛でる―文学―

身近にあった星々は、文学作品のなかで、時に吉凶を示すものとして描かれています。その記述から、当時の人びとが星や宇宙をどのように捉えていたかを探ります。

2. 星を読む①―陰陽道・易・占―

天体の観測、暦の作成、漏刻（水時計の管理）、陰陽（占い）を司る陰陽道は、江戸時代になると、民間において暦や方角の吉凶を占う民間信仰として広く社会へと定着していきます。

3. 星を読む②―暦―

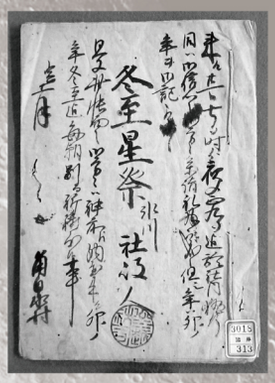
古くから日本では月の満ち欠けをもとに作成した太陰太陽暦を用いてきました。その作成には、天体の観測や計算が必要でした。明治６年(1873)、明治政府は太陽暦を採用します。

4. 星を観る―天文学―

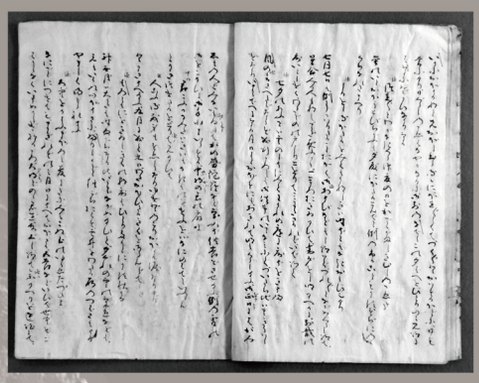
中国からもたらされた日本の天文学は独自の変容を遂げ、江戸時代に至ると、欧州から新たな天文学がもたらされたことにより大きな転換期を迎えました。江戸時代から現代に至る天文学の変遷を概観します。

おわりに―星を見た人びとの記録―

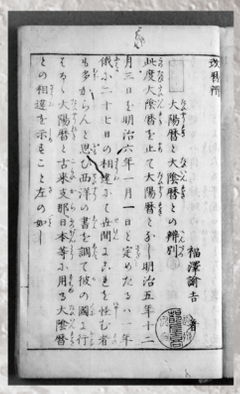
学問として天文に触れることはない人びとも、壮大な天体ショーに接した際には、その様子を記してきました。本企画展の結びとして、現代に至るまでの星を見た人びとの記録を紹介します。



①

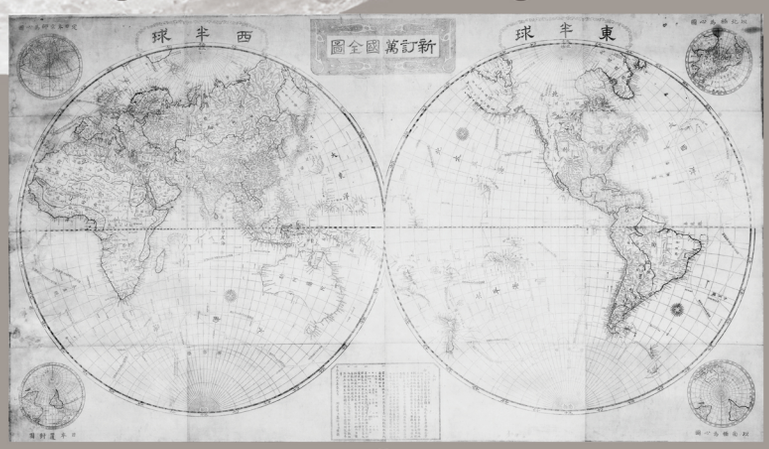


②



③

④



⑤

①〔冬至星祭〕（木版本）（猪鼻家文書313）
②「源氏物語（まほろし）」（奥貫家文書2992）
③「改暦弁」（福沢諭吉著、平川家文書1010-2）
④「閑田次筆　巻之一」（井上家文書3064）
⑤新訂万国全図（粕谷氏収集文書1）
背景：Moon - North Polar Mosaic, Color（NASA Image and Video Library）
表：「初学天文指南鈔　巻之一」（埼玉県教育史編さん室移籍文書101）
〔九星生命吉神軒支表外ト占の書〕（新井（佐）家文書23287）
伝染性流行病届之発期之記録（小林（正）文書1663）

さいたまけんりつもんじょかん
埼玉県立文書館
Saitama Prefectural Archives
〒330-0063　埼玉県さいたま市浦和区高砂 4-3-18
TEL　048-865-0112　URL　https://monjo.spec.ed.jp/